

ミャンマー森林研究所との共同研究計画の締結

令和2年2月4日

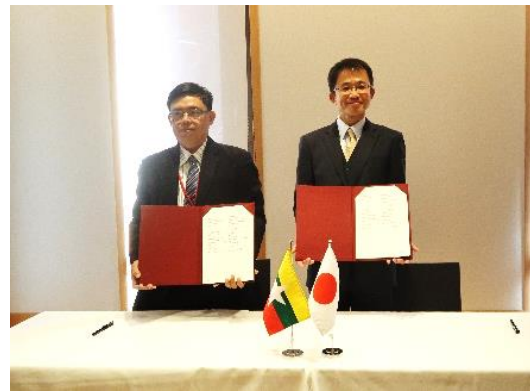
1月21日、森林総合研究所とミャンマー連邦共和国（以下「ミャンマー」）自然資源環境保全省森林局の「科学・技術共同研究に関する覚書」の期間を延長する追加文書への署名・締結が行われ、森林総合研究所林木育種センター（以下「林木育種センター」）とミャンマー森林局森林研究所との間で、令和3年3月末までを実施期間とするミャンマーにおけるチークの苗畑技術改善に関する共同研究計画が署名・締結されました。

ミャンマーには、全世界のチーク天然林約29百万ヘクタールのうち約13百万ヘクタールが所在していると言われており、バゴ地方はHome of Teakとも呼ばれています。一方、FAOの報告書によると、同国では、1990年から2015年にかけて毎年約40万ヘクタールの森林面積が減少しています。現在、ミャンマー政府によってチークを主体とする大規模な植林事業が進められており、国際協力機構（JICA）では、「持続可能な自然資源管理能力向上支援プロジェクト」（以下「JICAプロジェクト」）を通じて優良な種苗の供給のための能力向上支援をしています。

林木育種センターでは、これまで国際熱帯木材機関（ITTO）のプロジェクトや、東京大学との共同研究などを通じて、ミャンマー森林局、同森林研究所等とともにミャンマーにおけるチークの育種計画策定や遺伝的改良に関する研究に取り組んできました。今回署名・締結したミャンマー森林研究所との苗畑技術改善に関する共同研究が、JICAプロジェクトを通してミャンマーにおける優良な種苗の供給に貢献できることを期待しています。



覚書追加文書の署名（左：Nyi Nyi Kyaw 森林局長、右：沢田森林総合研究所所長）



共同研究計画文書の署名（左：Thaung Naing Oo 森林研究所長、右：川島林木育種センター海外協力部長）



チーク苗畑（ミャンマー森林研究所 Letpankhon 研究ステーション）

（海外協力部）